黒船のもたらした「広東人」旋風―ペリー提督の漢文通訳・羅森の虚像と実像―

陶徳民 2002.11.16？ 神戸大学

１　１８５４年春の日本で爆発した羅森（字向喬、1821-1899）の人気

1.1　扇面題詩を求める武士や庶民が殺到する（横浜で五百枚、下田で千枚）

1.2　黒船に登った吉田松陰も羅森との会見を願う（「広東人羅森」と書いた紙を差し出す）

2　「羅旋風」の正体

2.1 広東・南海出身の郷紳：挙人父の薫陶を受け、アヘン戦争中「平英団」を組織

2.2　香港の実業家：中国語教師（総督府・モリソン・レッグ）⇒不動産屋⇒海外情報屋

2.3　ペリーの対日交渉に不可欠な漢文通訳

2.3.1　ウィリヤムズ（Samuel Wells Williams、衛三畏、1813-1884）、謝氏と羅森

2.3.2　『日本日記』の公刊、英訳および公文書『ペリー提督日本遠征記』への収録

2.3.3　物産調査（下田の織物、箱館の昆布）と情報交流（『南京紀事』・『治安策』の作成）

3　画師等による様々な横顔

3.1　「罪科」を逃れるために外国船に乗り込んだもの（高橋文?　『横浜紀事』）

3.2　列強に荷担する「無節操」のもの（小島又次郎の画注、『亜墨利加一条写』所収）

3.3　「値切り」上手な「貧乏人」（上記小島又次郎の画注；無名氏による下田買物図）

3.4　通訳の賤業（「?　舌之門」）に陥る「士人」（官士明篤の詰問、『日本日記』所載）

4　「同文対語人」による腹を割る詩文唱酬

4.1　「君産広東我沽津。相逢萍水亦天縁。火船直闖鯨涛至。看破五湖無限辺。」（某役人）

4.2　「横浜相遇?　無因。和議皆安仰頼君。遠方鴃舌今朝会。幸観同文対語人。」（関研次）

4.3　平山謙次郎（名は敬忠、号省斎、1815-1890）：開国当時は徒目付、慶応年間は外国総奉行。明治１２年、敬神愛国を唱える「神道大成教」を創立

4.3.1　羅森の近著を拝読後の返事：「凡万国交際之道、宜首講此義也。（中略）請足跡到処、必以此道説各国君主、是継孔孟之志於千万年後、以拡於全世界中者也。」

4.3.2　平山への羅森の返事：「現代は古代と非常に異なった時代だ。それを知りながら心ある者が見て見ぬふりをすることができるだろうか。」

５　幕末日本人の開国進取精神の形成に対する羅森の影響

5.1　『日本日記』による鼓舞（『?　?　貫珍』を読んだ松陰、橋本左内、岩瀬忠震と島津斉彬）

5.2　『南京紀事』による警鐘（松陰『清国?　豊乱記』・無名氏『満清紀事』）

5.3　慶応元年、幕府使節柴田剛中一行が香港で羅森を訪ね、「漢英対訳書一冊」を受贈